

質問 これまでのがんの三大療法の効果が疑われ、かえって余命を縮めるといわれ、「病院に近づくな」とすら著名な医師が主張する方が出てきていますが、なぜなのでしょう？  
ではがんの SAT 療法では、どのような考え方でセラピーをすすめているのでしょうか？

がんの SAT 療法開発者 宗像恒次博士

がんが発見される、数センチ以上の大きさになるとき、医療機関で手術・抗がん剤・放射線療法をして、腫瘍部分の縮小や画像上での消失をさせますががん幹細胞は残ります。がん幹細胞自体は非常に数が少なく通常はほとんど増殖はしません（冬眠状態=静止期にある）。しかし子孫であるそのがん細胞は急速に増殖し、生命を脅かします。手術・抗がん剤・放射線療法はほとんどの場合この急速に増殖するがん細胞を一時的に殺すことができても、がん幹細胞の消失まで効果が至らないことが多いのです。だから治療後に残存したがんの幹細胞から再びがん細胞が生じ、分裂を促し、増殖し、再び数センチ以上の悪性腫瘍として再発、転移して発見されることとなります。いつ再発・転移するかは、本人のもつ慢性ストレスの程度によるので、ごく早い時があれば、10年以上たってからのときもあります。一般に三大療法を行うことは患者の生体全体に著しく負担をかける場合が多く、それを繰り返すにつけることで余命が縮まることがあるのです。

がん細胞自体は誰でも毎日 3000 個～5000 個が発生しています。がんは、通常、慢性ストレスが10年以上続くことで生じています。慢性ストレスの10年以上の持続でがん細胞が増殖し、数センチの腫瘍として発見されるにはがん細胞が10億個以上必要です。

10年以上の持続する慢性ストレスの原因は、親族関係や職場関係などの人間関係ストレスもあれば、自分の仕事などに関係します。ですから慢性ストレスを自分の人生から消すことが必要です。それには周りの評価を気にする他者報酬型人生から、自分のあるがままを愉しむ自己報酬型人生に変化させる必要があります。

SAT 療法は、自分のあるがままを愉しむ自己報酬型人生を実現し、慢性ストレスを消失させることで、がん診断される腫瘍の大きさになることを予防したり、腫瘍の画像上の消失を期したり、また再発を予防するものです。